

Knowledge is power をめぐって

文 / 山下太郎

昨今繰り広げられる学校教育をめぐる議論においては、「知識は力である (knowledge is power)」という意見が優勢を占めているように感じられる。これは、文部科学省の進めた「ゆとりの教育」に対する批判や失望を反映していると思われる。

このスローガンは知識偏重の教育を是正するべく登場したが、教えるべき知識の分量を抑制したり、教える時間数を制限したりするようになると、子供たちを含めた教育現場からも、保護者サイドからも不安の声があがるようになった。すなわち、「知識」はやはりパワーであり、「ゆとりの教育」は子供たちのパワーダウンにつながるのだ、と。皮肉なことに、鳴り物入りで登場した「ゆとりの教育」は、本来子供たちの「生きる力」のパワーアップを目指すものであったはずである。では、ボタンの掛け違いはどこから始まったのか。

この問題を論じるなら、まず学校教育でやりとりされる「知識」の意味を問い直す必要がある。「ゆとりの教育」に対する不安の多くは、学習内容や授業時間数の制限が「高校受験」や「大学受験」に対して不利に働くのではないかという懸念と無関係ではない。つまり、大学や高校の入試は、子供たちの「生きる力」でなく「知識」の多寡を問う現実が歴然としてある。したがって、「ゆとりの教育」を導入するなら、大学や高校の入試システムも抜本的に変革する必要があった。だが、それはなされず、今も大学受験といえば、「センター試験」 60万人の受験生が挑戦する が象徴するように、「正解を記号で選べ」式の問題が幅をきかせている。

私見を述べれば、「知識」も「生きる力」もどちらも大切である。両者は、対立する関係にあるのではなく、ともに助け合うものである。「知識」は「生きる力」の基礎になると思うからである。仮に「生きる力」を「学ぶ力」と言い換えるなら、「知識」が「学ぶ力」を支えることは自明であろう。だが、今の日本では「知識」と「学ぶ力」の区別が曖昧である。「知識」は試験で評価できるが、「学ぶ力」は試験で評価できるものではない。だが、「学力試験」とは「知識」の試験であり、世間ではその「知識の量」を「学力」と呼んでいる。

「学ぶ力」、すなわち「学力」は、むしろ「知的好奇心 (curiosity)」と呼ぶべきものである。「知識」がいくらあっても「学力」が身に付かないケースも多いのである。実際、「知識」をたくさん詰め込んだはずの大学生といえども、みながみな「学ぶ力」を生き生きと発揮させているとはいえない。

このことと関連して、孔子は次のように述べている。「基礎的知識を習得するだけで自分流の考えを育てないなら、その知識が何のためにあるのかが曖昧になる。逆に、自分流の考えをめぐらせても、基礎的知識を学ばない限り、その考えは独断に陥り危険である」と。つまり、学校教育においては、「知識」習得の議論だけに終始してはいけないということである。生徒は「知識」をもとにしていかに「自分流の考え」を養成していくのか。大人はその過程を見守り、工夫し、子供たちを応援しなければいけない。だが、現状はどうだろうか。(次ページへ続く)

かつて文部科学省が唱えた「個性の教育」にせよ、今唱えている「ゆとりの教育」にせよ、その理念を現実のものとするには、子供たちにとっては弛まぬ基礎知識の習得が不可欠である。だが一方では、その基礎知識の習得は何のために位置づけられるのか？という子供たちの素朴な問いに対して、教師や親が真摯な答え 答える人の数だけあろう を用意する必要があるだろう。「知識は受験のために必要」という答えが判で押し返ってくるのが現状では、子供たちがやがて学ぶことに失望しても、それを一方的に非難することは出来ない。

私ならば、孔子が示唆したように、「知識」は子供たちが 本当は大人たちも 自分流の考えを養う基礎になる、と答えたい。だが、ギリシアの伝統に則して述べれば、自分流の考えを養うためには、いったん習得した「知識」を疑うことが大切である。獲得した「知識」への疑問をもつことによって、新しい発見や新しい知識への欲求も生まれるのである。

このように、「知識」と「学力」は元来別の言葉であり、この区別はきわめて重要である。だが、もっと大切なことは、こうして培われる「学力」が何のためにあるのか、という問いである。無論、いろいろな答えが用意されてしかるべきである。「立身出世のため(金儲け、就職のためも含む)」、「親のため」、「国家のため」などなど。しかし、プラトンであれば、「善く生きるために」と答えるだろう。

では、「善く生きる」とはどういうことか？ こう考え出すと、問いはあふれるように湧いてくる。「立身出世は善く生きることにつながるだろうか？」などなど。つまり、教育に関する議論は、結局のところ哲学の問題にたどり着く。それもそのはず、日本が採用している教育システムのルーツはプラトンの開いたアカデミーに遡るからである。

ラテン語に *Scientia scientiarum* (知識の中の知識) という表現があり、これは「哲学」を意味する。「哲学 (philosophy)」とは「知を愛すること」を意味する以上、「学ぶ力」すなわち「知的好奇心」と無関係の言葉ではない。問題は、何を知るかということであるが、プラトンにおいては「善のイデア」ということになる。すなわち、「善とは何か」についての究極の答え(真の幸福は何か)を考究することが、本当の意味で「学ぶ」ことに他ならなかった。

哲学は「生きる力」を支える源であり、「生きる力」が強まれば「知識」に対する欲求も強くなる。社会に出て働いて初めて「知への欲求」がかきたてられることも不思議ではない。この点で、社会に出てから「学ぶ」という選択肢は重要な意味を持っている。また、プラトンは「無知の知」(自分は知らないということを知っている、すなわち自覚している)という言葉を残したが、その意味は社会に出てこそ鮮明に理解できるのではないだろうか。

すでにふれたように、今の学校教育では、知識が学力と取り違えられ、どれだけ努力しても100点を超える点数はとれない仕組みになっている。逆に言えば、100点を絶対視することで、学校で学ぶことには必ず正解があると錯覚するようになる。例えば、テストで100点を取ったら、「知の知」が身に付くということになるのだろうか。あるいは、試験で悪い点を取り自己嫌悪に陥ることが「無知の知」ということなのだろうか。この習慣や発想が身に付くことは何より怖い。

人生は真っ白の紙に自分の絵を描くことを意味する。試験至上主義の教育は、塗り絵に指定された色を塗ることを求めている。線からはみ出さずに上手に塗れるかどうかは指導のポイントである。だが、それは自分の絵を描くことではない。他人の人生でなく、自分の人生を生きること。デルポイの神託の告げる「汝自らを知れ」という言葉は、今も新鮮な輝きを放っている。

(山の学校代表 山下太郎)

クラス紹介

今月号は、平成20年度春学期の授業をふりかえり、それぞれのクラスの先生が日頃何を大切に考え、どのような授業を展開しているのかを、「クラスだより」として寄稿していただきました。下記の時間割(春学期現在)と照らし合わせの上、ご覧ください。

平成20年度・春学期(4月~7月)の時間割

	4:10-5:10	5:30-6:30	6:40-8:00	8:10-9:30
火	しぜん (低学年&高学年) 3:50~5:20	ことば4年A	ことば(作文小5~6年) ラテン語初級講読A	
水	ことば1年 ことば2年	かず1年 かず2年 かず3・4年A	中1~3・日本語の読み書き 古文講読	中1~3・数の基本A ラテン語入門
木	ことば3年 かず5~6年	ことば5~6年 かず4年B	中1・英語の基本 中2~3・英語の基本 高1~3・英語の基本	中1~3・数の基本B ギリシア語入門 ウェブプログラミング入門
金	かず3~6年	ことば4年B		ラテン語初級講読B ラテン語中級講読

新しい講師の紹介

四月から着任した新しい先生をご紹介します。

うえお なおみち
上尾 真道

京都大学大学院在籍。小学生の「かず1年」を担当していただいています。

きしもと こうた
岸本 廣大

京都大学大学院在籍。小学生の「かず3~4年A」と、中学生の「中1~3年・日本語の読み書き」、「中1・英語の基本」を担当していただいています。

こんどう ともふみ
近藤 知史

立命館大学在籍。中学生の「中1~3年・数の基本A」を担当していただいています。

たかぎ あきら
高木 彬

京都工芸繊維大学大学院在籍。小学生の「ことば2年」、「ことば4年A」、「ことば作文指導5~6年」、「かず2年」を担当していただいています。

ひろかわ なおゆき
広川 直幸

京都大学非常勤講師。高校・一般の「ギリシア語入門」、「ラテン語中級講読」を担当していただいています。

「しぜん」 1～6年生

担当 山下育子 / 山下太郎

しぜんだより 春学期

花の香りをふくんだやわらかく甘い空気が漂う中、風の音や鳥のさえずりに耳を傾けていると訳もなく何だか嬉しくなってくる、そんな春の季節を迎えました。春をはじめとする日本の自然には季節毎にさまざまな変化がありますが、それを五感をフルに発揮して感じ取ることができるのは幸せなことだと思います。

そんな自然の楽しみ方については、人それぞれあるでしょう。とくに春は、目的を持たずに自分の足を使ってゆっくり歩いたり、見晴らしのよい場所では腰をおろして静かに耳を澄ませてみたり、草原ならばそのまま裸足になって寝ころんで空を仰いでみたり、雑木林に分け入って森林浴を試みたり、何をしても自然の恵みを味わえるよい季節です。

さてこの春、山の学校「しぜんクラス」は新1年生を迎え再び賑やかにスタートしています。今年も、お山の自然の中に身を置きながら、自然とのかかわり・自然の恵み・自然の大切さなどに触れる活動を通して、仲間とともに学ぶ楽しい時間にしたいと思っています。

4月のあるクラス テーマ“春ってどんなの？” よもぎ摘み～よもぎだんごを作ろう！”

4月22日は、自己紹介につづき、瓶に飾ったサクラ、ヤマブキの花の香り確かめたり、教室から見える青い空を望みながら、五感を通じた自分が感じる春について思いだし、静かに考えてみる時間を持ちました。



その後、しぜん日記を書いてきた上級生に立って発表をしてもらいながら、1年生向けにしぜん日記の使い方や記録する内容などについてお話をしました。その後は、春に新芽を伸ばして成長中の「よもぎ」の葉を見つけに行きました。たくさん採れたら「よもぎだんご」にしてみましょ。それでは3班に分かれて、よもぎ探しに出発！



あった！

こういう葉っぱがよもぎよ

葉先の柔らかかなところを摘む

いい匂いがするね



ザルに集めるよ

ボールに白玉粉を入れます

手を洗ったら準備OK！

水を加えてよくこねていく



茹でたよもぎを刻み加える



素手で感触を確かめながら、丸めたお団子をバットに並べていきました。



柔らかくなりすぎたら粉をたして



火加減OK!



沸騰したところへ1個ずつ



浮いてきてから1、2分



紙コップとスプーンを準備



よもぎ団子に小豆煮をのせて



いける、おいしい!



おいしくできたよ!



おかわりください! ことばの先生も僕の作ったお団子をどうぞ! 最後まで材料を残さず使いきり、ふるまってくれたU君



よもぎだんごは多少柔らかめで、よもぎのよい香りがしておかわり続出。晩ご飯もちゃんと食べるから、とのこと。おだんごでふくれた子どもたちの頬が、夕陽に照らされてピカピカ輝いていました。

5月のあるクラス テーマ 分かち合おう“しぜん日記の発表”と“竹の子ほり!”

5月13日、この日は前日の雨もあがり、晴れ間がでてきました。まず初めに、大切なコレクションの鉱石、自分で集めたという色とりどりの箱入りの石、恐竜の歯の化石などのお披露目があり、一人ずつみんなに説明をしてもらいました。その後、順にしぜん日記の発表をしました。1年生は覚えてたの大きな字で、『通学中发现した花やチョウのこと、畑で見つけた実やウサギのウンチを見たこと』などを絵入りの日記にし、また、上級生は、『風の音について、よく見る雲の種類について、学校の花壇の野菜について、家で育てているイチゴの成長について、母の日のプレゼントのこと、家で植えたニガウリのこと、学校で植えたヘチマの成長、大文字山で見つけたセミの幼虫のこと、植物園で見たタンポポからセイヨウタンポポとニホンタンポポの違いについて調べたこと、植物園のフタバアオイについてとその観察記録、通学中发现したカゲロウについて』など、さまざまな発表がありました。植物、生き物に大変興味を持っている2年生Mちゃんのしぜん日記は、最近では1ページがぎっしりと鉛筆の文字で埋め尽くされ、書きたいことが溢れ出てくる感じが伝わってきます。一つのテーマの観察記録が5枚ほど続くこともあります。自然を見つめ観察することが心を豊かにし、見れば見るほど自然があちから近づいてくるように感じられるかも知れません。一人一人が自然からの贈り物を受けとめ、自分なりの自然観を小さな頃から養い育ててほしいと心から願うものです。

ですから、しぜん日記は、自分が自然の中で気づいたことや感動したことをメモ、文章、スケッチなどの形にして書き残しながらみんなに伝えるためのものですが、日記に書くことは決して強制するものではありません。自然を見る心、感じる心を持っていることが一番大切だからです。また、忘れないように日記に書きとめていても、立って発表するのに躊躇する場合は、決して無理せず先生と一緒に発表しながらみんなに教えてあげます。書くだけでもいいし、言葉で伝えるだけでもいいし、実物を見せてあげるのもいいし、心の中に大切に持っているだけでもいいでしょう。発表のやりとりを見ていると、何より、仲間の発表に耳を傾け、疑問に思ったことをさっと手をあげて質問する積極的な姿と、それに応えるやりとりが学年を越えて

活発に交わされており、またそのやりとりをしっかりと聞いている姿もあり楽しみな時間です。私も楽しみに聞かせてもらっています。仲間の一人ずつの発表内容について、少し立ち止まり考えながら、また図鑑で確かめながら進んでいきます。



「礼」「おねがいします」



書いた中から1枚を選び、順に、ゆっくりと、大きな声で発表していきます



楽しい絵入りです



では、発表します



どっちを発表しようかな



みんな静かに聞いています



地球環境についてかな



珍しい植物も登場します



「はい、質問」



すぐさま応えます



ボードで補足説明



「はい、質問」



立って説明します



書いておこう

後半は、いよいよ竹の子ほりにチャレンジします。{ 備物 / スコップ、軍手、ビニール袋、シャベル }



あったあった



ここにも見つけた



いっしょに掘ろうよ



うまく、掘れるか？



きれいに掘れたよ



けっこう上手かった



どう、このタケノコ



力をいれてヨイショ！

近年、お山の奥からイノシシが毎晩出没し、若い竹の子を残らず食べ尽くしていましたが、今年は幸いにもイノシシに先を越されることはなく、孟宗竹の竹の子がたくさん育ちました。笹の葉の落ち葉が敷き詰められた竹やぶに下り、あちこちに頭をのぞかせた竹の子を見つけ一人2～3個以上は収穫できたようです。竹の子を掘りあげる作業は、たやすくはないものです。上級生は、自分の見つけた竹の子を掘るだけでなく、懸命にスコップを使う1年生をまず見守り助けてあげられる温かい姿がありました。自分だけが上手いけばよいのではなく、自分よりも小さな仲間を先に気遣ってあげられる温かく豊かな人間性がしっかりと育っていることを目の当たりにして、何より嬉しく思えた時間となりました。

後日談ですが、収穫した竹の子は、各ご家庭で竹の子ごはん、竹の子炒め、竹の子の金平、スープ、お吸い物、おみそ汁、煮物などのお料理にして食べたことを、一人ずつが手をあげて満足げに教えてくれました。3日間も形を変えて食べられ、また次はチンジャオロースにもしたい...と日記に書いてあったり、お料理を下さったお母さまには心より感謝です。

5月のあるクラス テーマ 森へいこう！“森の葉っぱしらべ”

5月27日、初夏を思わせる気持ちのよい天気恵まれました。この日は、森に入り、多くの生き物の命を支える葉っぱに光を当てました。はじめに、ササ、ヤツデ、サクラ、ウメ、シダ類、クス、ユキヤナギ、アジサイ、ドクダミの葉などを教室で紹介しましたが、葉の特徴をしっかりとらえていて、次々と名前を言い当ててしまうのには驚きでした。



森をつくっているものは



これは何かな？



この大きな木は？



よく見ながら森の奥へ



ぼくはこれにしよう



これに決めようかな



落ち葉もいろいろあるよ



ぼくはこれ！決めた



木をささえにゲット



とうとう木登りに



わたしはこれにしたわ！



ほかに孢子でふえるものは？



画用紙を半分に切って



どうはろうかな？



2枚ともつかってベタリ



よし、このへんにベタリ



くだものの葉っぱかなあ？



昆虫図鑑？



あーっ、これが！



似ているけどちょっと違う？

植物図鑑と樹木の葉図鑑をめくりながら、これだと思う葉の名前を調べて名前を書きこみました。たくさん集めた人は、1枚に何種類もの葉をはり、順に調べていきました。みんなの作品をあわせて、「森の葉っぱ図鑑」ができるのが楽しみです。
(文責 山下育子)

『ことば』1年生 担当 福西亮馬

このクラスでは、言葉への興味を「見守る」ということを大事に考えています。見守るというのは、生徒たちの発する声や、書いてくれた字を、絶対的にほめるということです。その中に何が含まれているかをイメージしてみるということです。

今の時期は、何をどのように教えるかということよりも、生徒自身の言葉を聞くことの方がむしろ先にあるものとして大事だと考えます。その生徒たちが、自分の言葉（言語活動のはじめ）を通じて、自分自身を受け容れてもらったという思い出を持ち、いつかそれを自信の糧にして喜んでもらえる日が来ればと願っています。

春学期は、幼稚園で取り組んだことのある俳句や、みんなのよく知っている言葉遊びを題材に、ひらがなへの興味をじっくり見守っています。その一生懸命に書いている姿を見てると、私自身の思い出とも重なります。というのも、私自身、ひらがなをようやく自信をもって書けるようになったのは、一年生の冬ごろだったように記憶しているからです。その時になってようやく先生から、赤ペンで誉めてもらったことが自信となって、後々の支えになったことを覚えています。今ではその待ってもらったという思い出の方が強く、それを授業の手がかりにしています。たとえば、「は」や「を」の使い方は、大人であればすぐに目に付いて指摘したくなるのですが、俳句作りの時などは言わんとする内容の方がより大切なために、また、後になれば必ず誰もができてきていることなので、焦らずに諭そうと気をつけています。

いくつかの言葉遊びの中で、人気があるのは『しりとりに』です。授業でのそれは、順に一人ずつ言うたでたててしまうので、みんなで同時に考えることにしています。たとえば「う」の次だと、すぐさま「うみ!」「うに!」「うきわ!」「うらやま!」「うらやましい!」「うり!」「うりこひめ!」と、いろいろと連想して出てきます。一つに絞るのがもったないくらいですが、それを「この中で『うみ』がいい人?」と、多数決で決める際、せつかく自分の言ったものに全然手を挙げず、他の人のものには「はーい!」と手を挙げるという傾向があるところにおかしみがあります。その繰り返し楽しいようです。

そのように、子どもたちの間で流行り出すものには、その時その時の意味があるようです。何度も「ねえ、しりとりにしよう!」と言ってきかないことがあるのも、言葉への興味が出て来ている証拠だと思います。一度それを経験している大人たちはすぐに飽きてしまいますが、しかし子どもたちはその最中にいるので、遊びではなくて真剣です。そのような「時期にあるもの」を、素通りせず、大事に見ていくとどうなるかが期待するところです。

さて、生徒たちは自分の興味を話すことが大好きです。その中で、発言の許しを得て発する言葉には、それがどんなにたどたどしくても、称揚すべき何かを含んでいます。「ねえ! ぼくの話聞いて、聞いて!」。こうした意欲が満たされることは、言葉に対する興味の根っこにあたるので、何よりも大事にしています。特に高学年に上がるにつれて手を挙げなくなっていく傾向を思うと、今それをできていること自体が貴重に思われます。

生徒たちはまたお話好きです。その頭には、吸い取り紙のように何でも入ってしまいます。お話はもちろん言葉への興味の入り口です。それなので、できるだけ時間を作って昔話をすることにしています。昔話には、絵本や紙芝居を使う手もありますが、できれば何も使わない方がじかにその表情を見ることがので、今年は素話に挑戦しています。

話の元には柳田国男の『日本の昔話』を使っています。その中から、生徒の顔を思い浮かべながら、一つずつお話を暗記することは、苦勞であり楽しみです。

時間がなくなって、「さあ、この後はどうなるでしょうか? 続きは次回のお楽しみに」と、途中で幕を設けなければならない時は、思いがけず非難に遭ってしまいます。申し訳ないと同時に、そのようにいつまでも残念がってくれる、今の時期が本当に大事だと思われま。夏休みを経て、どのような成長をされるのかが楽しみです。

(文責 福西亮馬)

『ことば』2年生 担当 高木 彬^{あきら}

このクラスでは主に、詩を朗読して筆写し、絵本を読んでいます。

詩は、4年生(A)と同じく、言葉を聴き、また発声するために用いています。(この取り組みの基本的な考え方については、本誌の『ことば』4年生(A)の記事をご覧くださいと思います。)2年生のクラスでも、最初のうちは4年生(A)と同じ中原中也の作品を毎回とり上げていたのですが、リズムや響きを感じるためとはいえ、やはり独特の言いまわしや古い言葉が2年生の子ども達には少し難しい場合もあるように感じ、現在は谷川俊太郎のひらがな詩なども取り入れています。初読でつまる部分も、何度か繰り返し朗読するうちに、言葉のリズムを体感できるようになります。こうした体感的な実践が、言葉に親しむ重要な契機のひとつになると、私は思っています。

また筆写は、4年生(A)では物語文(『トロッコ』)で取り組んでいるのですが、2年生では朗読したのと同じ詩文を用いています。筆写するなかで、文中の言葉を漢字に直したくなったり、あるいは言葉の意味に興味湧くこともしばしばであり、そういうときには、漢字や意味について学ぶ時間をとっています。

さらに、そうして詩を読み込むうちに見えてきた情景を、絵として具体化するというも行っています。この場合の“絵”とは、実際の人物や風景を写生することや、自身の思いを表現することというより、あくまでも言葉を絵画化することです。これはウェブログにも書かせていただいたのですが、言葉を絵にするためには、自分の頭の中に情景が立ち上がるくらいに、そこに書かれてある言葉をよく読み込む必要があります。絵を描きながら「ここはどうだったか」と言葉を辿りなおすことで、言葉が実践に即して印象づけられ、また言葉から情景を想像する力が養われると、私は考えます。

絵本は、物語に親しむために、積極的に読んでいます。子ども達にとっては、やはり言葉は絵と併せて接するほうが親しみやすいようですし、またこの時期にあっては、言葉を抽象的記号ではなく具体的な事物と結びつけたものとして経験するためにも、意義深いことだと思われるからです。

(文責 高木彬)

『ことば』3年生 担当 浅野直樹

このクラスは山下太郎先生から引き継ぎました。比較するとどうしても自分の力不足が気にかかります。実際、生徒から「園長先生のほうが上手やった!」と言われたこともあります。さすがにそのときは少し落ち込みましたが、そう言われた理由を考えてみました。

まず技術面が考えられます。確かに板書の字やかみしばいの朗読などがあまり上手ではないかもしれせん。あまりに難しすぎる課題を与えてしまったこともあります。幸い生徒たちは正直なので、そうした場合はすぐにわかり、次から改めることができます。

そして最も困っていることは、どれくらい強制するかということです。勉強は自分から進んでするはずのことであり、ましてや小学3年生のことば(国語)となると、下手に何かを無理に練習させて嫌いになられるよりも、好きな本でも勝手に読ませておくほうがよっぽど効果があることでしょう。とはいえ本人の言うことをすべて受け入れるわけにはいきません。たとえ嫌がろうと歯医者に連れて行かなければならないときがあるのと同様に、強制して読み書きの練習をさせなければならないときもあります。このバランスの取り方を心得ているとはまだまだ言えません。

さて、なぜこのように普通なら書かないようなことを書いたのかというと、「ことば」を通していちばん伝えたいことを示すためです。つまり、人とのやり取りする中で、固定観念などにとらわれず、よりよいものを追求する姿勢です。

具体的には、初回の授業では、自己紹介のためのいくつかの質問に書いて答えてもらい、それを各自発表しました。お互いのことをやり取りするのが関係の第一歩ですから。

また、連休明けの回には楽しかった出来事について作文をしてもらいました。これもそれぞれみんなの前で読んでもらい、質問をしました。作文で何を書いたらよいかわからず困るというなら、読み手を想像し、質問されそうなことを先取りすると書きやすいでしょう。

その他の時間はいろいろな題材を使い、あれこれ話し合いながら「ことば」に触れました。ここで書いたような意図が伝わっていれば幸いです。

(文責 浅野直樹)

このクラスでは、おもに三つのことに取り組んでいます。

一つ目は、中原中也の詩を耳で聴き、また朗読することです。

言葉は文字である前に、また意味を伝える媒体である前に、声であり音です。たとえ同じ表記、同じ意味であっても、音声として発するとき、言葉はさまざまに姿を変えます。そのリズムや響き方によって、その場かぎりの独特なニュアンスが生まれるからです。

電子メールを打つときに絵文字を使う理由の一つには、短い文章の中で、声を持っている独特のニュアンスを言い足したいということがあると思います。「楽しかった。」と打つよりも、「楽しかった (^0^)/」と打つほうが、楽しげな雰囲気伝えることができます。ここに文字文化の新しい可能性が開けています。

しかしここには危険もあります。今のところ絵文字の種類は、声の持つニュアンスの多様さにほとんど届いていません。言葉を尽くして、なんとか表現しようとしていたニュアンスが、一文字の絵文字によって一発変換されるとき、その微妙で豊かな表現が、紋切り型の表現へと均質化します。そこでコミュニケーションは明らかに粗雑なものとなります。危惧すべきは、もともとの声の多様なニュアンスまでもが、絵文字の決まりきったパターンの枠内に終始し、そこに当てはまらない曖昧なものは発声しようとしなくなることです。ここに言葉の怖さがあります。

このクラスで中也の詩をとりあげたのは、声を大切にするためです。声に耳を澄ませるとき、言葉の世界は豊かに広がります。とくに音楽的と評される中也の詩を聴き、それを朗読することで、言葉をまず音として体験し、言葉が持つリズムや響きの美しさに親しむことを目指しています。

このクラスで取り組んでいることの二つ目は、漢字を成り立ちから考えることです。

漢字は、世界の文字の中でも非常に稀な、象形文字です。アルファベットとは違い、一字の漢字には膨大な視覚情報が埋め込まれており、それ単体で一枚の“絵”として意味を表します。先ほど絵文字について触れましたが、そもそも漢字こそ絵文字の本家です。しかも、メールの絵文字では「口」のマーク文字で済まされてしまうところが、漢字では、歌う、唱う、唄う、謡う、謳う、詠う、と微妙なニュアンスの差異まで網羅しています。数万から数十万種に及ぶとも言われる漢字は、絵文字の豊饒な到達点です。

こうした豊饒さは、丸暗記させられる場合、一転して、難解さ、複雑さでしかなくなります。暗記に非常な労力が必要となるわりに忘れやすく、また字形も間違えやすく混同しがちになり、その漢字と意味(読み)とが連繫しなくなります。漢字を丸暗記することほど苦痛で非生産的なことはありません。

このクラスでは、「星」や「空」などテーマを毎回設定して(初回は生徒さんのお名前でした)、プリントを準備し、平均五文字ずつ、漢字を成り立ちから学んでいます。そうすることで、一つひとつの漢字を、楽しみながら、正しく深く理解することができ、そこから豊かな漢字の世界に漕ぎ出して行くことができます。それは、漢字を介して物事の多様なありさまや感情の細やかな揺れを学ぶことにもつながります。

このクラスの取り組みの三つ目は、物語を読むことです。

物語を読むということは、文章を逐一分析することではなく、ある虚構された世界に入りこむことです。書かれていることを手がかりに、それ以上のことを、身をもって経験することです。

もちろん、そうなるまでには、分からないところを何度も読み返し、筆写する、という段階が必要です。しかし、文字から世界を立ち上げようとするそうした努力は、想像力を育む最高級の養分となります。テレビ画面に映る世界は、すでに誰かによって目に見えるものとして用意された世界ですが、物語の世界は、読者の能動的・積極的な想像力(=創造力)があって初めて立ち上がる世界だからです。

春学期では、芥川龍之介の『トロッコ』をとりあげ、朗読、筆写、意見の交換を繰り返しました。また、そうすることによって初めて見えてきた景色や気色を、“絵”として具体化することを試みました。

このクラスでは、以上の三点を通して、言葉の豊かさに触れ、言葉に親しむことを目指しています。

(文責 高木 彬)

このクラスでは去年に引き続いて俳句に親しんでいます。『守破離』という言葉がありますが、去年暗唱と筆写で覚えた俳句の型を活かし、今度は自分たちの俳句に挑戦しています。その際、どこかで現状の力不足を覚えるはずですが、それでこそまた『守』（芭蕉や一茶などの俳句）に立ち返った時に新しい発見ができるものと期待しています。

時には印象を得るために外へ出て、「目には青葉」の緑や、赤い夕焼け空を見たり、ブランコや幼稚園の園舎を見たりして懐かしんでいます。そうして部屋に戻って来て、いざ俳句を「思い出すように」書き出します。

最初は、五七五にまとまらない気持ちをどうやってその形の中に落とし込むか、そこでの苦勞がよく見られます。それを経た俳句には、「できた！」という嬉々とした気持ちが溢れており、また同時に「これでいいのかな...？」という不安も覗いています。それをどういう気持ちで書いてくれたのが、同じ場所で見えていた私にもよく解るので、「いいよ」とうなずくことがほとんどです。そうしてしかし、だんだん自信を持ってきているようです。それが私も嬉しいです。実際、言葉を一生懸命に練ることは、自己を肯定することに他ならないのだと思います。

ある時は、「また思いついた！」の連続で、きりがいいこともありました。その際には後に用意していたものをやめて、それだけに集中しました。普通なら「それだけ」という要素には飽きが来るものですが、そうではないところに感心します。

ゆうひのした こどもがはしって かえってく
 サクラさき ひとのこころを まどわせる
 おかあさん サクラを見たら ほっとする
 サクラもち 花より団子 ひと休み
 くもをみて ひこうきぐもの あとがある
 目には青葉 はっぱのトンネル くぐりぬけ

審美感を大事にしている人、家族を思い浮かべる人、習った俳句をさっそく本歌取りしてくれる人と、それぞれの良さが伺われます。

また最近では、漢字の基礎作りをしています。一年生の漢字から、一つずつ、書き順も含めて見て行き、苦手意識を克服するよう努めています。いまどきの言葉で言えば、ウィルスチェックです。目標は、四年生の現在習っているところまでですが、特に二年生までの漢字をチェックできれば、目処がつかます。というのも多くの漢字が、簡単なものを部品とする組み合わせでできているからです。そのためにも、一、二年生で習う漢字を書き順も含めて自信たっぷりに書けることが大切だと言えます。

たとえば「相」という三年生で習う漢字も、分解してみると、「木」と「目」という、どれも一年生で習う漢字で組み立てられていることに気が付きます。それに雨かんむりをつければ、「霜」ができます。「霜」はずっと後の中学生で習いますが、「これなら書けそう」という気になってもらえると思います。

授業でも、「休」という漢字が「人」が「木」にもたれている様子から作られていると説明した時に、ある生徒が「木を本にしたら体！」と言ってくれました。その通りです。このように漢字には自由度があって、分解や組み立てを楽しむことができれば、だんだん面白くなってきます。

ある時また、「子という漢字は二画か三画か？」という質問をしました。正直に言うと、私も答を見るまでは曖昧でした。答は三画で、正解者は一人だけでした。

ところが、その次に「字」を見せた際、「はい！」とすぐに手が上がって、「六画です」と答えてくれた生徒がいました。「正解」と言われて、その生徒は嬉しそうでした。「子」が三画ということを用いたわけですが、するとその生徒は、後の全部の漢字についても、同様に画数を言い当ててきました。誰に頼まれたわけでもなしにです。それをどんどん正解していった、最後に「よっしゃー！」とガッツポーズをしたので、自分から勉強を楽しむことができているように感じました。

俳句にせよ漢字にせよ、毎回同じことの繰り返しのはずなのですが、生徒たちのモチベーションの高さに驚かされます。またそのような前向きな気持ちをいつもありがたく思っています。引き続きこの調子で、秋学期からも取り組んでほしいと願っています。

（文責 福西亮馬）

『ことば』5・6年生 担当 浅野直樹

このクラスの生徒たちとは一番長い人でもう3年の付き合いです。どんなことに興味を持っているかもだいたい把握しています。人数もさほど多くないこともあり、なるべくそれぞれの人に合ったことをしたいと思っていました。そこで昨年度の最後の回に、「ことば」に関わることで今年度には何がしたいかを聞きました。そうすると工作をしたいという意見が出され、どこが「ことば」と関わっているのかを聞くと、作り方をことばで書いて説明するところだと言ってくれました。なるほどと思い、全員がそのことで一致したので、それなら工作をすると約束しました。

その約束を守るために春休みに準備をして、今年度の第一回から工作をしました。設計図を読み解くために、待ちきれない様子で国語辞典を引いている様子を見たときには、工作をしてよかったなと感じました。余談ですが、設計士という仕事から職業について考えてもらうことや、自分の手で物を作ることも狙っていました。それはいかに生きるかということや、自分の頭で物事を考えるということにつながります。

しかしすべてが思惑通りだったわけではありません。どうしても時間がかかり、飽きがくるとともに他の活動を犠牲にしてしまったことは否定できません。

ということで、工作が終わってからは、敬語や反対語、「ず」と「づ」の識別、漢字の成り立ちなどについてのプリントをしています。さすがは5年生で、すごい勢いで進めていきます。

ところで、山の学校では一週間の学習記録表を小学5年生から書いてもらうことになっています。このクラスの生徒たちも書き始めたのですが、本人に任せただけだと低調になっていました。これはまさに「ことば」の実践ですから、意識を高めてもらおうと思いました。本人に口頭で質問するととても面白い返事をしてくれるので、それをぜひ書き留めてほしいのです。よそ行きのことばよりも、本当に好きなことを書いてくれたほうがうれしいです。そのほうが「ことば」への熱意が断然高まるはずですから。

(文責 浅野直樹)

山びこクラブ



対象 小学生(無料)
とき 11月29日(土)
10:00~11:30
内容 『竹馬であそぼう!』

- ・幼稚園でしたことのなかった人は、ぜひ今日が「乗れた日」になって帰ってね!
- ・当時、たくさん乗れた人も、今度は色々な乗り方にチャレンジしてみましょう。
- ・雨の日は『ハンカチおとし』をしたりして、お部屋の中であそびましょう。

『ことば（作文指導）』（5・6年生） 担当 高木 彬^{あきら}

このクラスは、作文をとおして言葉に親しむことを、目的としています。

作文（composition）とは、読んで字の如く、「文」を「作」ること、あるいは「作」られた「文」のことです。それはブロックを組み立てることに似ています。相応しい色や形をそのつど選び、全体の配置を考えながら、単語というブロックを一つひとつ組み上げていく充足感。組み上げるさなか、最初に頭の中にあった全体像より良いものを思い付き、そこへ発展させていく悦び。試行錯誤の上に完成させていくなかで、新しい作品の発想が湧いたときの、居ても立ってもいられないような、あの昂揚感。

このクラスでまず大切にしたいのは、こうした“作ること”への純粋な意欲と想像力です。誰一人として同じ人間が存在しないように、作文にも決まった答えはありません。たとえ全員の作るテーマが同じでも、生みだされる作品はどれ一つとして同じものはありません。想像力は模範解答を超えるのです。

その上で、もうひとつの重要な側面として、“作文はコミュニケーションだ”ということ、忘れずにおきたいと思えます。対話と同じで、作文は、読む相手が居ることで初めて成り立つからです。それは一方的な自己主張ではありません。想像力をはたらかせ、読む相手の身になって自分の文章を読み返せば、よく伝わるところとそうでないところが自ずと見えてきます。原稿用紙の向こう側に相手の顔を想像することが、文章の質を向上させます。

自身の創作意欲に没頭するあまり、読む相手への配慮がないがしろになるようでは、せっかく作った文も自己満足の内にとどまってしまいます。しかしながら、作文とは、読む相手に媚びることでもありません。独創性と客観性の両方を兼ね備えることが、作文の難しいところであり、また醍醐味でもあります。

さらに言えば、相手になんとか伝えようとするところにこそある種のオリジナリティーが生まれ、また逆に、それが独自の世界観の表現であるからこそ相手の胸に突き刺さる、ということもあるでしょう。文章を組み立てるための想像力、読み手の身になるための想像力、こうした想像力の相補的な両面が、作文には必要であり、また、作文をとおして養われることでもあります。

このクラスの受講者は現在お一人ですが、作文をする前に、まずその内容について対話することを心掛けています。対話するなかで、作文の構想が形になりはじめるからです。自分が想像していることを相手が理解できるように説明するには、ある程度、論理の客観性が問われます。また相手の意見を聞くことで自分の発想が刺激され、自分の思考を相対化することもできます。彼は、近い将来、一人で筆を執るでしょう。そして、自分の頭の中だけで論理的な対話をシミュレーションすることになるでしょう。この作文のクラスで繰り返す実際の対話は、そうしたシミュレーションの基盤を形成するものとなります。

また、作文の対象は、できるだけ幅広く採っていきたいと思っています。体験したことや、体験しなかった空想や夢、日頃感じていることや意見といった、つまり自分自身について。文学、音楽、絵画、写真、映像といった、さまざまなかたちをとった他者の表現について。あるいは、いま観察している、一個の事物について。

既に知っていると思っていた自分自身を再発見したときの驚きや、未だ知らない世界に触れたときの感動は、必ず文章表現の強い動機となり、また豊饒な糧となります。作文の対象を一つの形式に限定しないのは、想像力の赴くままにブロックを組み立てるためには、沢山のブロックを自分のなかに蓄えることが必要だからです。このように、このクラスでは、作文技術の向上を目指すと同時に、作文をとおして言葉に親しみ、自分の世界を拡げることを目指しています。

（文責 高木 彬）

小学生・かずの部

『かず』 1年生 担当 うえおなみち 上尾真道 / 福西亮馬

春学期を振り返って

始めまして、上尾真道と申します。今年の五月より福西亮馬先生と一緒に、一年生のかずの授業を担当させて頂いています。生徒たちは、小学校に入ったばかりで初めて本格的な勉強を開始するとあり、不安もあることでしょうか、みな好奇心旺盛に楽しみながら様々な課題に取り組んでおられます。遊ぶときの元気の良さそのままに勉強にも取り組んでいるのを見ると、改めて、学びとは本来、わくわくするような楽しいものなのだなと感じさせられます。

「かず」という科目は、学年が進むと「算数」という科目に、そして中学校にあがると「数学」という科目になっていきます。「数学」と聞くと、嫌な思い出が蘇る方々もおられるのではないのでしょうか。ややこしい数式がたくさん出てきて、何か複雑な計算をやって、たったひとつの正解を探すという作業を、中学時代や高校時代に嫌というほどやらされた経験のある方もおられると思います。そしてそういうとき、必ずこういう風に思ったのではないのでしょうか。「こんなこと世の中に出て何の役に立つんだろう」と。そんなけったいな科目の原点に「かず」という科目はあります。けれども実は、これほど身近で役立つものはないかもしれません。世の中は不思議で不可解なことだらけです。大人にとってすらそうなのですから、これから世界のことをたくさん知っていこうとしている子供たちにとってはなおさらです。「かず」の授業では、なにより、このような不思議や不可解に挑戦していく態度をまず身に付けることが重要なものだとは私は考えています。分からないこと、答えの見えないことに対して、私たちはどのように立ち向かっていくことができるでしょうか。論理的に順序だてて考えていくことが必要かもしれません。例えば、「迷路」を解くように、道筋を丁寧に追って、「この道は間違い、じゃ、こっちの道はどうだろう」と、少しずつ正しい進路を探っていくことが必要です。あるいは、ものごとをよく観察して手掛かりを見つけていくことも大切でしょう。例えば、「間違い探し」を解くように、観察したものを見比べ、違いを見つけ、その違いにどういう意味があるのか知ろうとする姿勢が大切です。そして何より、自分ひとりの力でそうした謎に取り組むための集中力と忍耐強さを養わなければなりません。もちろん、時には互いに助け合うことは重要なことです。ひとりの力でできることはたかが知れています。けれども、自分の力で何かをやりとげようと努力し、それによって誰かを助けてあげることのできるような人同士でなければ、「助け合い」は成り立ちません。「かず」の授業で出されるそれぞれの課題は、子供たちのそうした自主的な問題解決の力を育む機会として生徒たちに配られています。

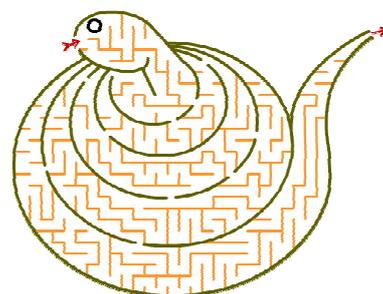
「かず」の授業で学ぶことのできるこうした姿勢は、もちろん、これから足し算や引き算の勉強をしていく時に役立つばかりではありません。おそらくは「学ぶこと」、「知ること」、そしてそれを通して「自分の考えを磨いていくこと」を長い人生を通じて支えてくれるものであるはずで、「かず」の授業では、こうした支えを楽しさとともに根付かせられたらと願っていますが、生徒たちもしっかりとこうした期待に答えてくれているように感じています。

(文責 上尾真道)

「考えること」の裾野を広げよう！

今学期は、いろいろな計算に習熟する前に、みんなの一番よく知っている「迷路」を使って、考えることを楽しんでもらえるように配慮しています。それと同時に、学校でせっかく初めて習うことへの興味を損なわないように気を付けています。

迷路はそれ自体が面白いので、必ず「もっとしたい！」と言うケースが出てきます。しかしそれを許すと、一問を解くことが雑になってしまうので、「今日は七枚しかないからじっくり味わってほしい」と言っています。そうすることで、またしたい気持ちを失くさないように気を配っ



ています。

算数の興味には大まかに二つあります。一つは数の仕組みに対する興味で、もう一つは考えることそれ自体にです。どちらも大事なのですが、前者は学校で習ってからそれを復習する方が効果的です。そのためクラスでは今は、後者に近い「考えることの裾野を広げる」ということに主眼を置いて取り組んでいます。

考えること自体が好きになれば、結局のところ算数が好きになってきます。たとえば文章題があります。ほとんどの生徒が、それを考えることから逃れたいという思いを持っているわけですが、同時に考えることが好きならば、「きっとこれを解けたら…」という気持ちの方が打ち勝って、取り組めるようになります。

また、好きになることに関して言えば、じっくり考えることの方が、早く考えることよりも意味を持ちます。ある時、生徒ができた迷路を持って丸つけのために先生の前で並んでいて、ちらとほかの人のやっている様子を見るなり、「あ、まだそこやってるの?」と言ったことがあります。決して悪気があったわけではなく、言われた方もさほど気にしているようではなかったのですが、私は一瞬ドキリとして、全体に言う必要があると思いました。

「早くできたら、早いという価値がある。同じように、じっくり考えたら、じっくり考えたという価値がある。それだけの時間集中したということは、誰にでもできることではないから、それも大事なことです」と。するとその後、最後になった一人が「できた!」と言った時に、もうとっくにできていた一人が、次のように言ったのでした。「あ、できたの? ようがんばったなあ!」と。それを聞いて私も嬉しかったです。

また、迷路と合わせて、上尾先生の用意される「あみだくじパズル」も面白いです。補助線を引くという問題で、コツが分かると簡単なのですが、わからないと一瞬と泥沼にはまってしまいます。そういうシンプルな問題は、頭を使う問題です。

面白いことに、そうしたパズルのあとに、足し算のプリントを出した時、「あ、さんすうや!」と言われたことがあります。「そう、算数やで」と言って渡すと、とてもうれしそうに解いてくれました。たまにはそういう動機付けも必要だと思います。今はそのように何にでも興味津津であり、この好奇心のかたまりを大事にしていきたいと思います。

(文責 福西亮馬)

『かず』2年生

担当 高木 あきら 彬

アルキメデスが風呂につかって溢れた湯を見て「アルキメデスの原理」(水中の物体は、その物体が押しのけた水(流体)の重量だけ軽くなるという原理。いわゆる「浮力」)を発見したとき、「ヘウレーカ!」(わかった)と叫びながら裸で街中を走り回ったという故事はあまりにも有名ですが、このクラスで大切にしたいのも、そのような「わかった!」という脳が感電するような閃きの瞬間です。もちろん実際に裸で走り回るわけにはいきませんが、そのぐらいに、「わかった」ときの喜びは絶大なのです。

アルキメデスはただ風呂につかって、気持ち良くなって、たまたまふと原理を発見したのではありません。もしそうだったら、あんなに走り回って喜んだりしなかったでしょう。彼はある人物から無理難題とも思える問題を言い渡され、それが解けないまま、ほとんど困り果てて、疲れきった体を休めるために風呂に入ったのです。どうしてもわからない、しかしただ一人で粘り強く考えつづけ、その末にようやく「わかった」からこそ、アルキメデスはあのように喜んだのでしょう。

このクラスでも、パズルとドリルの取り組みにおいて、このような、粘り強く考えつづけた末の「わかった」という体験を、最大限に尊重したいと思います。問題が難しければ難しいほど、それが解けたときの喜びもひとしおです。そしてそれは大きな自信になりますし、次の問題に立ち向かう勇気となります。解けない問題は、将来の大きな「わかった!」に繋がる“タネ”であり、それを根気よく育てることが肝要なのです。また、そのタネを沢山持っていればいるほど、将来の楽しみも増えるというものです。

もちろん古代ギリシアと現代の日本では時代も状況もまるっきり違います。しかしその「ヘウレーカ!」という閃きの喜びは、アルキメデスのそれと何ら変わるところがありません。

(文責 高木彬)

春学期を振り返って

今学期のかずのクラスは、「試行錯誤」のクラスでした。何が「試行錯誤」だったのか？それはもちろんドリルやパズル、間違い探しにひたむきに取り組んだ生徒たちが「試行錯誤」を繰り返していたのです。今学期のパズルは、主に数字を順にたどってゴールに向かったり、交わらないように同じ数字同士を結びつけたり、特定の場所以外の全てのマスを通してゴールを目指したり、数字が被らないように空白を埋めていったりするものを用意しました。最初は難易度が低いものから、そして次第に高いものへと難しくしていきました。当初はパズルのルールに慣れていなかったのか、みんな机に向かって一生懸命解いていました。それでも何回か問題をこなすうちに、ある生徒から「こんなの簡単すぎる！」という声が聞かれるようになったのですが、そんな子どもだんだんと難易度が上がるにつれて、「先生、これ無理やって。」という驚きにも近い声を上げることが往々にしてありました。そんなとき、彼らは大抵ヒントをねだるのですが、私はなんとか自力で解いてもらえるようにと、直接的なヒントよりも回りくどく間接的なヒントを出します。例えばスタートからゴールに向かうのではなく、ゴールからスタートに向かってはどうだろう、といった具合です。すると、生徒たちは不満を口にしながらもまたじっくり考え始めます。それですんなり解ける場合もあれば、それでも行き詰ってしまう場合もあります。でも大抵の場合、みんな最後までには問題を解いてしまいます。そのときの顔はやはりとても嬉しそうです。「試行錯誤」を重ねた努力の賜物なのでしょう。逆に、先にパズルを終えた子がまだ悩んでいる子にちょっかいを出し、口からついヒントを漏らしてしまったこともありました。思いもよらずヒントを耳にして、答えに気づいてしまった子は少し残念そうでした。「試行錯誤」は自ら経験して初めて価値を有するのだと私は思っています。

間違い探しでも同様のことが見られました。私が準備する間違い探しは、明らかな間違いと非常に微妙な間違いが入り交じった問題です。プリントを手渡した直後、「これ全然違うやん。」と意気揚々と間違いにマークをつけていた子が、最後の一個を見つけるのに、非常に手間取る光景は当たり前でした。そんなときもヒントは必要最小限にしています。自ら「試行錯誤」して欲しいからです。そしてそのとき得られた喜びが何にも換えがたいことは彼ら自身が理解しているでしょう。少なくとも私はそう願っています。

ドリルにおいても、同様に生徒の「試行錯誤」と傍にいる大人の最低限の助言が重要なのです。ただ今学期、ドリルに関しては正直あまり進んだとは思えませんでした。それは、私が選んだ教材に主たる問題があったため、以後気をつけるべき反省点として、記憶に刻んでおこうと思います。

「試行錯誤」の末に自らの満足する成果を得る。当たり前のようですが、難しいことだと思います。もちろん私とて例外ではありません。初めて担当するクラス、どんな教材を準備して、どうやって子どもたちに接すればいいのか。3月末の私の頭はそれで一杯でした。最初の頃は、まず何よりも子どもたちの明るさや元気に圧倒されていましたし、準備した問題もあっという間に解かれてしまう始末。全然計画通りではありません。それでも「試行錯誤」。どうすれば生徒たちがパズルとドリルを楽しんでやってくれるのか、毎週考えていますが、その答えは未だ模索中です。子どもたちと違って、周りにはヒントをだす人が必ずしもいるわけではありません。(もちろん園長先生や他の先生方からアドバイスを受けることはあります。)この山の学校で学んでいる子どもたちも、いつか私と同様の経験をするようになるでしょう。その時に、このクラスで「試行錯誤」したことを思い出し、その困難に負けずに、乗り越えて欲しいと思います。

(文責 岸本廣大)

「間違い探し」には 100 問以上のストックがあるのですが、昨年から取り組んでいるこのクラスでは、とうとうそれを全部解かれてしまいました。本当にすごい生徒たちです。

来学期からは、5・6年生クラスでしている「論理パズル」への橋渡しになる問題をしていくつもりです。それによって、これまでに培った直感や集中力を活かしながら、少しずつ論理性を磨いて行きましょう。

パズルをする理由は、解けて楽しいという以外にも、「かず3・4年生」の記事で岸本先生がお書きの通り、「試行錯誤は自ら経験して初めてその価値を有する」という過程を見守るためです。小学生のうちには多かれ少なかれ、すぐ答が見つかる問題に対しては得意になる一方で、なかなか見つからないものには音を上げてしまう傾向があります。そのことを一足飛びにではなく徐々に見直していきたくて考えています。

一方で、時間を割いて学校の内容を見ることもあります。今学期は、2～3年生の文章題と、大きな数、かけ算と割り算の筆算を練習しました。特に筆算は大きな単元です。そこで、私が小学生の頃に、4年生の担任の先生から「これは教科書のやり方ではないですが、君たちがこれから何千回も計算することを考えて教えます」と言って、教えてもらったやり方を、今教えることにしています。それは、筆算を省略するやり方です。

$$\begin{array}{r} 160 \\ 4 \overline{) 640} \\ \underline{2} \end{array} \qquad \begin{array}{r} 200 \\ 5 \overline{) 1000} \\ \underline{0} \end{array} \qquad \begin{array}{r} 1317589 \\ 2 \overline{) 2635178} \\ \underline{1111} \end{array}$$

一番左の筆算を例にとると、 $6 \div 4$ の余りを、わざわざ $6-4$ と書いて求めず、頭の中でしてしまいます。

そして余りだけを（この場合6の下に）書くというやり方です。最初は慣れる必要がありますが、慣れれば圧倒的に早くなります。真ん中の筆算では、まったく数を下ろす必要がありませんし、一番右の筆算でも、下へ延々と筆算を続ける必要がなくなります。

$$\begin{array}{r} 1200 \\ \times 6000 \\ \hline ? \end{array} \quad \rightarrow \quad \begin{array}{r} 1200 \\ \times 6000 \\ \hline 72 \end{array}$$

またかけ算についても、たとえば0の多いかけ算では、式をずらしてするというコツがあります。0は最後に付け足します。そうすることで時間だけでなくミスも減らせます。

計算はパズルとは違い、試行錯誤のない作業です。しかしそれを確実にでき、さらには「面倒くさいものをどうやったらより簡単にできるか？」と考えることも、算数を得意に思えるようになる一つの柱です。ぜひ自分たちでも何かを編み出して、ほかの人に伝授してあげてほしいと思います。

(文責 福西亮馬)

このクラスでは、学校で習った内容について、最初から復習し、自信をつけてもらうことを目的にしています。その際、オーソドックスにドリルを使っています。そして学年によらず、6年生の生徒にも率先して1年生のドリルから計算・文章題と順にもらっています。そのうちに自分でも積み残しに気付いた時、それを拾い直すことをむしろ喜んでもらえるように、言葉がけを心がけています。



また一方で、授業の残り時間に、息抜きと同時に難しいものへの挑戦として、絵の浮き出てくる迷路に取り組んでいます。これは1年生のしている迷路よりもずっと難易度が高く、むしろ大人向けです。ゴールするまでに20分近くかかることもあります。幸いこのクラスではそれが楽しみの時間となっているようです。一週間に一枚、こうしたものでまとまった達成感が得られることは、仮に算数が苦手であればいっそう、大事なステップだと考えます。ましてやそれを得意に思ってもらえれば幸いです。その他いろいろ手を尽くして応援したいと思います。

(文責 福西亮馬)

去年までは、感覚的に解く中に論理的な要素を含んだパズルに取り組んできましたが、今年からはいよいよ高学年らしく、より本格的な論理性を必要とするパズルに挑戦しようとしています。

実はそのための論理パズルの本を、「中学・数の基本 A」担当の近藤先生が大切にしておられるのを持って来られて、私もそれを教えていただきました。その時、これほど数学を好きになれる、シンプルなものはない！と直感したのです。

たとえば、次のような文章が、論理パズルと呼ばれるものです。

問題

ルチア、マリア、ユリアの三人がいます。三人は、よい人魚、悪い人魚、人間のどれか一人ずつです。よい人魚は必ず真実を言い、悪い人魚は必ずうそを言い、人間は真実もうそも言います。

さて、ルチアが「マリアは人魚です」と証言し、マリアが「ルチアは人魚です」と証言しています。ユリアは一体、何者になるのでしょうか？

授業でこの問題をした時、生徒の A さんは、「マリアが何か」で場合分けして答を示してくれました。一方、B 君と C 君の解答を見ると、「ルチアが何か」で場合分けしており、D 君に至っては「人間はだれか」で場合分けしていました。そして最後に持ってきた E 君は、「ルチアの証言が真実かうそか」で場合分けするといった解き方でした。みんなの解答に、思わずうなりました。

こういった問題について、最初は口頭で、答だけを、または何に注目して解いたのかアイデアを説明してもらいます。そこで私の O.K. を得たら、今度は紙に書いてもらいます。

それを一時間で一問というペースでしています。初めての時は案の定、どこから手をつければよいか分からない様子でしたが、続けていくうちに、だんだんと「仮定をおく」という要領が見えてきました。そして最初は答を見つけるだけでしたが、慣れてくるとそれも早く出来るようになってきたので、それなら残りの時間に論理的に書いてもらおうということになったのです。

答に至る道筋を書くという作業は、「こうだから、こう」と、理屈を順に積み上げるわけですから、小学生にとって難しくないはずがありません。わかり切ったことも書く必要があります。これほどもどかしいことはなく、だからこそ書ききった時には、偶然にたよらず、完全に自分のものにできた達成感があります。さらに他の人もそれを見ることができ、人に理解してもらえてはじめて、「本当に解かった！」という喝采をあげることができます。そのような考えることの楽しみが、数学を好きになる根っこだと私は信じています。

帰る時間になってもまだ書き続けている生徒が、ようやく「書けた！」と見せてくれた時、その答案は本当に尊く、丸をつけることさえ憚られるように思います。そのような生徒たちが一生懸命、自分の言葉で書いてくれる解答を、ぜひいつかはご紹介したいと思います。

(文責 福西亮馬)

春学期を振り返って

今学期のことばのクラスは、『歴史小品』という20世紀前半に書かれた中国の歴史小説を読みました。そこには中国古代の歴史上の人物について、それぞれ史料が語る文言から、従来言われてきたものとは一線を画す人物像が、著者である郭沫若によって描き出されている作品です。これまでに「老子」^よ、「莊子」^よ、「孔子」^よ、「孟子」などそうそうたる偉人の物語を読んできました。各話の内容の詳細はブログの方にあるので、ここでは立ち入りませんが、これまで読んできた話から、この短編集の全体的な傾向が見て取れます。一言で言ってしまうと「偉人、それもまた人である」とでもなるでしょうか。そうそうたる顔ぶれにもかかわらず、話の中心はあくまで平々凡々たる内容です。偉人たちはある時には後悔し、またある時には嫉妬に狂い、また別の時には失望します。私たちが教科書などから知る威風堂々とした姿が語られることはそれほどありません。この短編集を読むことで、旧来の知識（というより寧ろイメージ）に揺さぶりをかけ、そして「多角的な視点」を提示してくれる。「一般的」にはそういう本だと思います。

しかし今回、この短編集を読むのは中学生です。「一般的」な人なら知っているであろう中国古代の偉人のイメージは、おそらくそれほど強固なものではないでしょうか。この本を読むことで初めて名を聞く人物もいるのではないのでしょうか。ほとんど先入観なく、純粹に物語を読解し、自らの感想を述べる。そしてその人物についての実際のイメージを私が伝える。その結果彼らのもった感想にどのような影響が生じるのか。今学期はこうした点がこのクラスの目的の一つでした。そして何よりも私がこの本をテキストに選んだ一因は、このような「未知」に直面した彼らがこの物語をどう捉えるのだろうか、ということに期待していた部分にもあります。

ただし、実際のクラスはそう上手くはいかないものです。最初の物語の感想は、私の想定した方向とは別を向いていました。はっきり言ってしまうと、その感想は私の期待に沿うものではありませんでした。「未知」なるものに直面したのだから当然なのかもしれません。寧ろ、「未知」に直面した彼らが考察を深めてくれるために、私が少し手伝いをしなければならないのです。そこで私は、当初考えていた1コマで1話進むというペースを緩和し、まず「多角的な視角」で物事を捉えるように、ゆっくりと解説、そして議論をすることにしました。話が抽象的で、私の拙い解説では理解しにくい点多々あったとは思いますが、クラスが回数を重ねるごとに、彼らが自発的に異なった視点から物語を眺めようとする態度が表れるようになってきました。例えば私の提示した問題点に、私と違う視角から異なった意見を述べたことがありました。そしてその考えをより説得的にするために、ただ意見を述べるだけでなく、そう思った理由、あるいは比喩といった手段を用いる場合も見受けられました。もちろん表現的に間違っていたり、論理的に少し疑問が残ったりする点もあります。しかし、そのような点をただ指摘するのではなく、議論の中で自らその間違いに気づいてもらえるようにしています。

そうしたクラスの成果はまだはっきりと目に見えるものではないと思います。教えたことを体得するのはもちろん重要です。ただそれよりも、その教えたことに自ら取り組む姿勢をとることが重要だと私は考えています。成果云々の話はそれからでしょう。今後はそうした成果が見えるような課題を出していくつもりです。けれども、ここでは成果自体が問題ではないということは覚えていただきたいと思います。

（文責 岸本廣大）

春学期を振り返って

今学期の英語のクラスは、中学校1年生ということもあり、「三步進んで二歩下がる」の言葉通り復習に徹したクラスでした。生徒たちが英語という外国語に初めて本格的に触れるにあたり、小学校や英会話とは違う(もちろんそうした場で行われる英語学習も重要なのは当然です。)言語としての英語を勉強して欲しいと、私は考えていました。その際に私が重要視したのは辞書と文法でした。

辞書といえば分厚くてかさばるし、重い本です。(最近は電子辞書も普及していて、必ずしもそうではないですが。)だからといって、私がそれを持って山の学校に上って来るように言ったのは、生徒たちに体力を付けてもらうためではありません。辞書は英語のみならず、勉強の必需品だからです。私のクラスでは、最初アルファベットの練習をし、その直後に、英和・和英辞書の引き方を教え、早速辞書を使って単語を引いてもらいました。アルファベットすら完璧に覚えていない彼らが、そんなことができるのかと疑問に思うかもしれませんが、実際にできてしまうのです。確かに、一つの単語でも“dictionary”といったやや長い語もあるため、非常に時間はかかるかもしれませんが、しかし、辞書を引いている時間は単なるロスではないのです。なぜなら辞書を引くことでアルファベットの順番や形を覚えるからです。ある時、探している単語と明らかに別のページを開いている生徒がいました。けれどもそこに目的の単語がないことが分かると、改めてアルファベットを確認して単語を引き、意味を調べてくれたのです。時間は倍以上かかりますが、その生徒はその時間に相当することを学んだのです。電子辞書も便利ですが、最初に触れるならやはり紙の辞書ではないでしょうか。このクラスでは一貫して、わからない単語は自発的に辞書を引いてもらうようにしました。

もう一つ重要視したのは、文法です。文法といえば面白くなくて難しいというイメージがあるかもしれませんが、確かにそういう一面は否定しきれません。しかし、文法は英語(そして外国語全般)において理解の要石です。いくら英語が聞き取れたりしゃべれたりしても、文法があやふやでは宝の持ち腐れです。またその言語の文法を理解することはその言語を話す人々の思考の仕方に触れることにもなります。ひいては自らの言語や思考の仕方を顧みることにもなるでしょう。しかし昨今の英語教育がリスニングや会話に重点を移している中、文法が重要なのかと思うかもしれません。しかし、私が山の学校で文法を重視するのは、寧ろ英語教育がそのような流れの中にあるからです。学校がリスニングや会話に重点を移したからといって授業時間が増えるわけではありません。つまり学校で文法を学ぶ時間はこれまでより少なくなるのです。これが悪いわけではありません。外国人教師や音響装置などが整った環境でリスニングや会話を学ぶことは有意義だし、学校はそれができる場なのです。しかし、だからこそ「山の学校」で文法を学ぶのです。「山の学校」は、学校が取捨選択して捨てざるを得なかった部分を丁寧に拾って生徒に渡してあげる補助的な役目をもっていると私は考えています。実際に今、生徒たちが学校で習っているのは会話を中心とした内容です。(まだ中1の最初ということもあるからでしょうが。)そのため、私が文法の解説をし始めると、きょとんとした顔になります。わからないのは悪いことではありません。重要なのはわかろうとすることです。このクラスでは、解説の復習 解説の復習、の復習...というように進めてきました。これは「一歩進んで二歩下がる」かもしれませんが、しかし、なんとも逆説的ですが、それは後退ではなく、間違いなく進歩です。

辞書と文法を駆使し、学校の学習を補い、何度も復習する。一見地味ですが、それが生徒たちの学習の一助になっていると私は信じています。

(文責 岸本廣大)

『英語の基本』 中2～3年生 担当 浅野直樹

今年度は中2～3 英語というクラス編成になっています。それぞれの学年や得意さもまちまちなので、一般論を書かせていただきます。英語の勉強の仕方のヒントにでもなればと思います。

一口に英語といっても、その中身は多様です。読む・書く・聞く・話すの4領域に分けることもできれば、その中の読むことについても文法・語彙・読解力(国語力)などに分けることもできます。そこからまず、各自の必要に応じてすべきことを見極める必要があります。

より必要とされるであろう読み書きに話を限定しましょう。アルファベットのつづり方やあいさつの学習を終えて、普通の英文にある程度親しんだら(中学2～3年程度)文法事項を含んだ1行の英文を和訳し、日本文を英訳する練習をひたすらすることをおすすめします。中学で英文法のほとんどすべてを学習するので、それを身につけさえすれば、あとは辞書があればどんな英文でも読むことができるようになるのです。そのために文法の問題集をするのも悪くはないですが、重要構文の和訳と英訳がシンプルで比較的飽きが来ず、実力がつく方法です。

とはいいいましても、中学生や高校生なら定期テストも気がかりでしょう。定期テスト対策としては、まず教科書の本文を音読し、ノートに筆写することがよいと思います。これなら英語が苦手だという人でも実行できます。それから全文和訳し、話の概要を頭に入れてから、最後に文法の問題集などをします。これまでの経験上、この順番がベストだと思います。

そして英文法がわかるようになったら、あとは語彙や語法の問題となります。そうすると興味のある英文をできるだけ数多く読むとよいでしょう。ここまでくると、英文が読めない原因は、語彙の不足か、たとえ日本語で書かれてあっても理解できないような内容のどちらかでしょう。

こうしたことを考慮しながら、それぞれの状況に適した学習を進めています。

(文責 浅野直樹)

～ラテン語こぼれ話～ 『比較』

「比較」を意味する英語は compare であるが、この言葉にはラテン語 par (パール)の名残が認められる。par とは、ゴルフの「パー」(規定打数に「等しい」の意)のことであり、「等しい」という意味を持つ。つまり、英語の compare には「等しくする」というニュアンスが込められている。

では、「比較する」と「等しくする」とは、どこで、どのようにつながるのか？

例えば、AさんとBさんの身長を「比較する」というとき、われわれは両者の性別、年齢、風邪を引いているかどうかなど、身長以外の条件はいっさい考慮に入れない。身長の「比較」を行う際、両者の身長以外の条件は「等しくする」、すなわち「すべて等しいものとみなす」必要がある。このことは、言い換えれば、比べたい条件以外のすべてを「無視する」ことでもある。

動物と異なり、人間が高度の文明社会を築くためには、何かと何かを計量的に「比較する」営みが不可避であるが、この手続きを人間の幸せの尺度とし

て用いるなら、それは誤りである。

たとえば、われわれが誰かと誰かを「比較する」というとき、それは無意識のうちに個人のかけがえのない価値を無視することにつながりかねない。親は自分の子を他人の子と「比較」したがるが、そのことが子供の自尊心を傷つけることに気づかない。

成績の「相対評価」というのは、他との「比較」において成り立つ評価のことである。これに対し、「絶対評価」における「絶対」

英語では absolute とは、「他との比較を断ち切っている」というニュアンスをもつ。

たとえば、親の子への愛は「絶対的」なものであり、他の子と比べ、自分の子はこの点がこれだけ優れているから愛す、というものではけっしてない。言い換えれば、愛は数量化できないということである。

人間が単純に物事の「比較」に熱心になるとき、本当に大切なものを見失う可能性が増えていく。

(文責 山下太郎)

今年の3月まで山の学校に生徒として通い、高校生の部の数学を学んでいた自分が今、先生として数学を教えていることにまだ奇妙な感覚を覚えます。

生徒のSさんの希望で学校の授業の予習を基本にして、授業でわからないことがあれば復習も適宜していき、テスト前には問題集を使って復習していこうということになりました。そしてもう1つ、私からの提案で論理パズルを1回の授業で1問解くことにしました。中学生以降になると問題に書かれていることを論理的に読み取り、式を立てるという作業が増えていきます。問題の文章中に書かれている事の中で何が重要なのか、または書かれていることからどのようなことを導き出せるかを考える能力を鍛えるために論理パズルはとてもよい材料になると考え、授業に組み込みました。実際に論理パズルとはどんな問題かということ、例えば次のような問題があります。

ここにA、B、Cの3人がいます。その正体は、天使と悪魔と道化（順不同）です。天使はつねに真実を述べ、悪魔はつねにウソを述べますが、道化は真実を述べることもウソを述べることもあり、意味をなさない錯乱発言をすることもあります。

A「Bは天使です」 B「Cは天使です」
いったいだれが何？

最初、Sさんにこれと同じタイプの問題を出してみたところ、文章を読んだところで固まってしまいました。さすがにとっかかりも教えずに論理パズルを解くのは難しいため、その日は私が解き方を示しました。この手の問題にはセオリーがあり、「仮に～が...であるとする」という風に考えることから始めます。上の問題であれば「仮にAが天使であるとする」と考え始めてみます。天使は真実を述べるのでAの発言「Bは天使です」は真実となり、Bは天使となってしまいます。ABがどちらも天使であることはありえないので、最初の仮定「Aが天使であるとする」は間違っていることとなります。次にまた新たな仮定「～が...であるとする」を同じように考えていき、矛盾のないA、B、Cのパターンを求めていきます。私はSさんが論理パズルに慣れるのに、4週ぐらいはかかるだろうと予想していましたが、最初の4問ぐらいは一緒に解いていって徐々に問題に慣れてもらおうと思っていたのですが、2週目に上の問題を出してみたところ、5分かからずに答えを出してきました。まさか前回1回の説明だけで問題を解ききるとは考えていなかったのですがそのときは「えっ！もうできたの?!」と驚きを隠しきれませんでした。今では多少詰まってもちょっとしたきっかけを与えればすらすらと解いてくれています。Sさんに「だいぶ慣れて来たかな？」と聞くと「いやー...まだ...」と少し笑いながら答えてくれますが、少しずつ問題のレベルを上げていっても解いている様子からは全く苦になっていないようです。

論理パズルを解くことに慣れたら、次は解き方を人にわかりやすく、論理的に説明する練習をしてみようと考えています。Sさんが自信満々に問題の説明をしてくれる日が待ち遠しいです。

(文責 近藤知史)

今年度は「中学数の基本 B」というクラス分けになりました。といっても全員昨年度から受け持っています。まずは昨年度のことで、時間的に前号には盛り込めなかったことから話を始めさせていただきます。

昨年度の冬学期には、ずっと幾何（図形）に取り組んでいた生徒がいました。前号では各種の定理を一つずつ証明しながら理解することが大切だと書きました。そしてその後、実際に一步ずつ着実に進み、ついには大学入試センター試験（！）を解くまでに至ったのです。決して無理をさせたものではありません。お馴染みの手続きを進めていくと面白いように解けるのです。

新年度はどの学年でも代数（計算）から始まることが多く、このクラスの生徒たちも例外ではありません。よって黙々と計算の練習をしている姿が目立ちました。それでは私の役割はというと、一つには間違いやすいパターンを発見することです。不思議なもので、だいたい間違えるところは同じ原因を持っているのです。ですから、間違えたところは全部消して解答を写して終わりにはしてほしくないのです。

そうしてしばらく計算の練習をすると、応用に入ります。文字式を習うと多くの人が、「奇数と奇数の和は偶数になることを証明せよ」といった文字式を用いた証明で苦労します。前述の例では2つの奇数を $2m - 1$ と $2n - 1$ などと置いて計算をして2でくくるわけです。しかし「連続する奇数の和は4の倍数になることを証明せよ」という問題なら、2つの奇数を $2m - 1$ と $2m + 1$ のように置きます。独立していたら別の文字を、従属していたら同じ文字を使うわけですが、この使い分けが難しいです。また、自分ですべてを書くなら、「 m, n は整数」といった断り書きも必要で、それも証明が取っつきにくい原因です。こうしたことに1つずつ引っかかりながら、数週間かけて証明をできるようになり、学校の試験ではマルをもらった生徒がいました。

数学は順序に従ってやれば必ずできるようになるのだと改めて強く思いました。

（文責 浅野直樹）



（老子）

日本語の読み書き

中学生 水曜日 pm 6 : 40 ~ 8 : 00

毎授業、テキストを少しずつ読破しながら、それに基づいた作文、小論文、討論を行っています。こうした「考えることを文章によって表現する」練習が、論理的思考力の鍛錬になることは言うまでもありません。今も、そして将来も必要不可欠となる「考える力」を磨きましょう！

『古文講読』

担当 前川 ^{ゆたか} 裕

今学期から新しく開講されました「古文講読」では、社会人の受講生1名とともに『徒然草』を最初から一段ずつ読み進めています。岩波文庫のテキストを基本に、他の校訂本や注解書、辞書を参考にしながら、原文の意味の正確な把握を目指して本文を訳しています。また一つの訳語に拘らず、もとの古語の持っている概念の意味の広がり・歴史的背景などについても可能な限り検討し、古文という世界全体の中における『徒然草』の位置を考えています。

訳・解釈を行う中で、古文としての意味と同時に、時代を超えて現代まで届くメッセージについても思いを馳せています。兼好法師の立場や時代性という制限はあるものの、人間についての深い洞察を伺わせる『徒然草』は、やはり素晴らしい作品であることを改めて実感させられることしきりです。

「古典講読」では、次期以降も引き続き『徒然草』を読み進める予定です。作品の性格上、途中からの参加にも全く問題はありません。ぜひ奮ってご参加ください。

山の学校・古典への誘い

古文・漢文に興味をもち始めた高校生から、もう一度原書に親しみたい大学生・一般の方まで、広く募集しています。

基本的に、学校で学ぶような文法をきっちり踏まえたうえで、本文の読み解きに取り組みます。他の「山の学校」の講座と同じく、単なる知識に留まらない、生き方を学ぶ場となります。みなさまのご参加をお待ちしております。

●【古文入門】(高校生・一般)

初めて古文を学ぶ方、文法を復習したい方を対象に、平易な本文を読むと同時に、文語文法について学びます。生きた知識として文法を使えることを目標とします。テキストはコピーにて配布の予定です。辞書および文法書は、お手持ちのもので結構です。

●【漢文入門】(高校生・一般)

漢文テキストの講読を行います。受講者のニーズに併せ、文法・句法を踏まえた正確な読み取りを目指します。テキストはコピーで配布の予定です。漢和辞典・文法書をお持ちの方は、ご準備いただけると幸いです。当初はお持ちでなくても結構です。

『ラテン語入門』

ゆたか
担当 前川 裕

今学期のラテン語初級文法は、大学院生1名が履修されています。1回に5課という早めのペースで取り組むことで、スピーディーに文法学習を進めています。

この「スピード」というものは語学には大変大切です。一課ずつ完璧に押さえていくことは、望ましいことではありますが、やはりだんだん苦しくなるものです。多少（多数？）のことが分からなくてもそれはそのままにして、どんどん先へ進めていくことにより、文法体系の全体を把握することがまず必要だと考えています。それからもう一度分からなかった所に戻ってみると、案外容易に理解できたりするものです。何回も文法書を通読することにより、少しずつ知識全体を深めていくことができる、そのためにも、まずは文法書全体を読んでおくことが重要です。

あなたもラテン語を学んでみませんか。3～4ヶ月、12回でスピーディーに全体を把握できます。これにより、古典の原文に取り組むための基礎力は十分につきます。「山の学校」では、皆さんの挑戦をお待ちしています。
(文責 前川 裕)

『ラテン語初級講読』A

ゆたか
担当 前川 裕

ラテン語初級講読は、大学院生1名・社会人1名で、引き続きセネカの「倫理書簡（ルキリウスへの手紙）」を読んでいます。社会人の方は前々期に初級文法を学ばれた方ですが、基本的な読解力については全く問題ありません。セネカが比較的読みやすいこともあります。継続して原文テキストを読んでいくことにより、とても力がつくことを実感しています。もちろん紛らわしい事項やマイナーな文法的約束などもありますが、それは「楽しみとしてのラテン語」の範囲を超えたものですから、気にすることはありません。ラテン語への親しみを深め、基本的な原文読解力をつけることを目指して、少しずつ読み進めています。

次期も続けて「倫理書簡」を読む予定です。初級文法を学ばれたことのある方でしたら、どなたでも参加できます。テキストは当方から配布いたします。
(文責 前川 裕)

～コラム～ 『ラテン語』

そもそも、ラテン語とはどのような言語なのだろうか。かつてある大学でラテン語を教えていたとき、「私はラテン音楽が好きなので、ラテン語の授業を選択しました。でも、イメージと全然違ってました」と言われたことがある。ラテン音楽とは南米の音楽のことで、一見ラテン語と関係ないと思われるかもしれない。だが「ラテン音楽」の歌詞は、いずれもスペイン語やポルトガル語という共通性があり、これらの言語を生み出した「母親」がほかならぬラテン語なのである。

二十一世紀の今日、言語学的にラテン語は「死語」と呼ばれるが、文化的に死語ではけっしてない。「漢字」の誕生は紀元前の中国に遡るが、漢文化の影響を受けた日本人は、今も漢字を用いることによって新しい文化創造を行っている。同様に、ラテン語の圧倒的な影響を受け続けたヨーロッパ人は、自国の言語を用いながらも、そこに見出せるギリシア・ローマ文化の影響を無意識のうちに「今」に生かし、「未来」に伝えている。

ラテン語を勉強して何の足しになるのか？という問いはよく耳にする。だが、それを説明するためには、たとえば、日本文化を理解する上で、漢字を学ぶことの意義を説くのと同じ苦勞を覚悟しなければならない。川が上流から下流に流れるように、私たちが日々接している英単語や、広い意味でのヨーロッパ文化の源流が、ギリシ

ア・ローマ文化ということになる。川を上流へ遡り、山の中でわき出る泉を見つける新鮮な驚きが、これらの古典語を学ぶと経験できるだろう。

たとえば、英単語を覚える際、「医者は毒を取るからドクトル（doctor）」と語呂合わせで綴りを覚えても、英単語のこのころ その成り立ちの秘密 に迫ることは出来ない。日本語の「有り難う」という言葉についても、外国人には、その発音を真似て「アリゲーター（alligator）」と結びつけて覚えてもらうよりも、この言葉の成り立ち 「有ることが難しい」、つまり相手だけでなく自分を包み込む一切への感謝 をなんとか説明してあげたい。

一見見慣れた英単語の一つ一つにも歴史がある。漢字の偏とつくり旁にそれぞれ意味が込められているように、英単語の成り立ちを語源に即して分析すると、そこから様々なメッセージをくみ取ることが可能となる。必要なのは、ちょっとした好奇心と冒険心である。

最近の英和辞書を手にとってみると、語源の説明が特に充実している。一つの言葉からまた別の言葉へと頁を繰るのは楽しい知的冒険であり、時には、お茶を片手にそういった説明を「読む」のも一興ではないだろうか。

(文責 山下太郎)

山下先生から引き継いで、今学期から私が担当することになりましたこの授業では、ウェルギリウスの『農耕詩』を読んでいます。ギリシア文学が専門で、おまけにウェルギリウスに対して苦手意識があった私に、果たして『農耕詩』を教えることができるのだろうか、と始める前は少し戸惑いましたが、蓋を開けてみるとあら不思議、これが抜群に面白いのです。なるほど、これがラテン文学の最高峰なのだなしみじみ実感しています。

授業の特色としては、韻律と修辞の二点に重きを置いているということが挙げられます。ウェルギリウスが用いる韻律はギリシアに由来するヘクサメロンという韻律です。ですが、ギリシア語とラテン語はアクセントの種類が違います。すなわち、ギリシア語は高低アクセントで、ラテン語は強弱アクセントなのです。そこからラテン詩独特の韻律の用い方が発展しました。韻律の強勢と語のアクセントをずらす、あるいは一致させる。また、そういった韻律上のテクニックを文の意味内容と関連させる。重い内容の文は重いリズムで、軽快な内容の文は軽快なリズムで、というようにラテン詩には独特の韻律の用いがあるので、それらを逐一確認しています。もちろん、その前段階として、韻律に合わせた正しい発音を一行一行確認しているという事は言うまでもありません。

また、修辞も重要視しています。例えばラテン詩では隠喩を用いて「海」のことを「大理石」と言ったりします。日本語に訳す場合、「大理石」としてしまっただけでは意味不明になるので、「海」あるいは直喩で言い換えて「大理石のような海」とでもするしかありません。結果、原文の持つイメージとはだいぶ離れてしまいます。訳すと消えてしまうものを味わってこそその原典読解ですから、隠喩や換喩を初めとする様々な修辞にできるかぎりの注意を払っています。

身体で感じたり、イメージを操作したりするこれらの作業は、実は大学の授業ではあまり顧みられていません。上手い日本語訳をつけるよりも、こちらのほうが本当は大切なだと私は常々考えていたのですが、授業で実現できるとは夢にも思っていませんでした。教えている私が教えられることの多い、とても貴重な時間になっています。

(文責 広川直幸)

第13回

ラテン語のゆうべ



前回の夕べ『Barba non facit philosophum
ローマ皇帝とヒゲ』の様子

とき 8月25日(月)

午後6:40～8:00

講師 広川 直幸

場所 北白川幼稚園・第3園舎

対象 ラテン語に関心のある方 (参加無料)

演題 ラテン語入門一歩前

『ギリシア語入門』

担当 広川直幸

今学期から始めました古典ギリシア語入門コース。受講者数二名。水谷智洋『古典ギリシア語初歩』を教科書に、一回一課のゆっくりとしたペースで進んでいます。一年36回の授業で36課の教科書を終える予定です。

さて、ギリシア、ギリシアと言いますものの、ギリシアとはポルトガル語経由で日本語に輸入されたラテン語で、ギリシア人がギリシアを呼ぶ呼び名とは異なります。では、その呼び名とは何か。それはすなわちヘッラス（現代ギリシア語ではエラーザ）です。実はこのヘッラスも日本語に輸入されています。希臘というのがそれです。この希臘、日本語では専ら「ギリシア」と読み習わされていますが、もとの中国語では「シーラー」と発音されます。そう、この希臘はヘッラスの音写なのです。すなわち、希臘と書いてギリシアと読むのは、二つの異なる伝統が極東の地で合流したということなのです。

さてさて、実際にギリシア語を学び始めると、まず見慣れない文字に戸惑うことになります。ギリシア文字は文字によって様々な書き方があり、こればかりは印刷された文字を見ていても分からないことなので、実際に行われている書き方を説明し、好みの書き方で書けばよしとしました。

つぎの難関はアクセントです。古典ギリシア語のアクセントは日本語と同じ高低アクセントです。ですから、古典ギリシア語は、一度慣れてしまえば、日本人にとって発音しやすい言語なのですが、アクセントの位置を定める規則が少し複雑です。これに関しては、いくら抽象的な規則の説明を読んでも駄目なので、間違うたびに、手本を示して直してもらうという方針をとっています。なので現在試行錯誤の真っ直中にいます。

さて、毎回授業でどのようなことをしているのかといいますと、練習問題の読解と語形変化の口頭練習、それから次に進む課の簡単な説明をしています。特に語形変化の練習はしつこくしつこく行っています。語学の初歩で学ぶべきことは語彙と文法の二つで、古典ギリシア語の初歩の文法とは要するに語形変化のことだからです。

まだ産声を上げたばかりのこの授業、目指すところはヨーロッパ精神に計り知れない影響を与えてきた古代ギリシア語文献の森に足を踏み入れることです。途中からの参加は難しいかも知れませんが、少しでも興味がおありならば、何なりとお尋ね下さい。

（文責 広川直幸）

『ウェブ・プログラミング入門』 (高校・一般クラス)

```
index.cgi
push( @items, new Link( $user->name, list_url() );
push( @items, [
    new Link( Word->new( "Option" ), mode_url( "option" ),
    new Link( Word->new( "Logout" ), logout_url() ),
]);
} else {
    push( @items, Word->new( "User" );
    push( @items, [
        new Link( Word->new( "Login" ), login_url() ),
        new Link( Word->new( "Register" ), register_url() ),
    ]);
}

# RSS
push( @items, Word->new( "RSS" );
my( @rss ) = ( new Link( Word->new( "oungeRSS" ), rss_url( "ounge" ) );

my( $menu_mode, $menu_id ) = @_;
if ( $menu_mode && $menu_mode eq "category" ) {
    push( @rss, new Link( Word->new( "CategoryRSS" ), rss_url( "category", $menu_id ) );
} elsif ( $menu_mode && $menu_mode eq "topic" ) {
    use Topic;
    my( $category_id ) = Topic->topic( $menu_id )->category_id();
    push( @rss,
        new Link( Word->new( "CategoryRSS" ), rss_url( "category",
        $category_id ),
        new Link( Word->new( "TopicRSS" ), rss_url( "topic", $menu_id ),
    ));
}
push( @items, \@rss );
```

現在、多くの人がインターネットを利用している。また、その利用形態は様々で、専ら情報収集に活用する場合もあれば、自ら情報を発信する場合もある。インターネットが一般的に流布しているとはいえ、情報発信に利用している人は全体のごく一部でしかない。しかし、受信にとどまらず発信することには、計り知れないメリットがあり、現代の情報社会ではますます重要な地位を占めていくことになることは間違いない。このような、情報発信という発想と技能を身に付けておくことで、今後の情報環境の変化にも柔軟に対応することができる力を養うことができる。

本授業では、このようなインターネットにおける情報発信にテーマを絞って、その具体的な方法の紹介と実習を行う予定です。授業内容は、受講生のコンピュータ、インターネット習熟度によって柔軟に対応しますが、概ねXHTMLとCGI(Perl)を扱う予定です。XHTMLは、インターネット上の情報発信の基礎となる技術で、普段目にするウェブページを構築する言語です。CGIは、ウェブ上のデータを柔軟に活用する手法で、多くの複雑なページで使われています。この他にも、必要に応じて関連分野の諸技術を取り扱うことがあります。

～ラテン語こぼれ話～

『モラルとマナー』

文 / 山下 太郎

日本語の「道徳」に相当する英語としてはモラル(moral)がある。この言葉はラテン語の mos(モース)に由来し、その基本的意味は「習慣」、「風習」である。古代ローマ人は、mos majorum(モース・マイヨールム)を尊重したが、これは「祖先の習慣」、意識すれば「祖先の生きた道」のことである。モラル(道徳)はマナー(作法)と違って、身振り手振りで教えることのできるものでなく、個々人の心の中で日々蘇らせるものである。

「祖先の生きた道」に近づくもっとも確実な方法の一つは、古典文学を読むことではなからうか。日本語で「古典」というと、「古」という字が示すように、昔書かれ、今も読み継がれる作品という意味になる。一方、英語のクラシックス(classics)という言葉には「古い」という意味はない。語源はラテン語の classicus で「最高クラスに属する」という意味を持つ。

一方、マナー(manner)の語源は、ラテン語で「手」を意味するマヌス(manus)である。マヌスに関連した英単語に manicure(マニキュア)があるが、この言葉には、「manus(手)を cureする(世話する)」というニュアンスが認められる。

ラテン語のマヌスとつながりを持つ英単語は案外多い。マニュアル(manual)は、形容詞だと「手による、手動の」、名詞だと「手引き書」のことで、やはり「手」と関係している。manufacture(工場制手工業)や manuscript(手書き原稿)にも同様の関連が認められる。その他 manage(運営する)、manifest(明らかな)、maintain(手で支える=保持する)といった単語もラテン語の manus(手)とつながりを持っている。

ちなみに、「マンネリ」の英語表記は、mannerism であり、マナー(manner)にイズムをつけた形である。何事につけ「マナー」が大切なのは当然であるが、それをあまりに強調しすぎると、文字通りマンネリ化する。実際マナーはモラルと違って時代によって、場所によってその中身が異なるのである。

モラルやマナーの話が出たついでに、道徳の「徳」に当たる virtue という英語に注目したい。virtue は通例「美德」と訳されるが、語源はラテン語の virtus(ウィルトゥース)である。元来「男(vir)らしさ」というニュアンスをもっていた。「男」を特徴づける要素として、戦場での「勇気」、「武勇の徳」を意味していたのである。

ローマで virtus(勇気)と並んで重んじられた徳目に pietas(ピエタース)がある。英語には piety(敬虔)という形で取り込まれているが、ローマにおいては、神を敬う心に加え、運命を尊ぶ心、国家への忠誠心、家族や友人への愛情など幅広い意味を持っていた。ウェルギリウスは叙事詩『アエネーイス』の中で、ウィルトゥースとピエタースを備えた理想的英雄として主人公アエネアス(ローマ建国の祖)を描いている。

一方、ローマの風刺詩人ユウェナーリスは Probitas laudatur et alget. (徳は賞賛されるが寒さで震える)と皮肉を述べた。Probitas(プロビタース)は英語の probity の語源であり、honesty とほぼ同じ意味を持つ。誰もが口では「徳」を称えるが、日々それを実践する者、心からその価値を信じる者はあまりに少ない。よって、「徳」は寒さで震えている、というのである。そういえば、あのピリー・ジョエルも、"Honesty is such a lonely word." (誠実さ)というのはあまりにも孤独な言葉だ)と歌っている。

だが、「徳」は果たして孤立するのだろうか。もし本当に孤立するものなら、それは無数の人間が踏みしめる「道」すなわち「モラル」とはならなかったはずである。中国の古典『論語』において孔子は、「徳孤ならず、必ず隣あり」と述べた。自分自身が「徳」を求めることは言うまでもないが、さらに「隣」に気づく力、あるいは見抜く力が重要だとされる。これは大切にしたい言葉であり、着眼である。単に私がそう思うだけではない。過去から現在に至るまでそう思う人間が無数にいたからこそ、今我々はこの言葉を読むことができるのである。

(文責 / 山下太郎)